

## 会津戦争と農兵

慶応4年(1868年)4月、江戸城が無血開城したため、行き場を失った新政府軍の振り上げたこぶしは、鳥羽・伏見の戦いで旧幕府軍の中心的戦力でかつ京都守護職として新選組を藩預かりの尊王攘夷派摘発部隊としていた会津藩に一気に振り下ろされました。

会津藩は鳥羽・伏見の戦いで旧来の軍制では新政府軍に対抗できないことを痛感し、①軍制の洋式化を取り入れ、フランス式兵法に、②隊を年齢別に編成し、白虎隊(16～17歳)・朱雀隊(18～35歳)・青龍隊(36～49歳)・玄武隊(50歳以上)と砲兵隊・築城隊などの部隊(3,000人)に改編します。このほか、旧幕府兵や徴募兵などが加わりましたが、総兵力が足りないので、③農兵の募集に急ぎ取り組みます。

最初の農兵募集は慶応4年1月で、代官所ごとに管轄の組数・石高や特別な状況を勘案して行われました。一般的には1代官所200人でしたが、野沢代官所は1組支配でしたので100人、<sup>たてのほら</sup>館原代官所(喜多方市山都町)は3組支配であったことと獵師が多かったことから200人、津川代官所(新潟県阿賀町)は阿賀野川水運の<sup>みなと</sup>湊町で経済力があつたことと船頭を海運人夫として期待したことから250人が割り当てになりました。黒川代官所(会津若松市)は本来町分なので農兵の割り当てはないはずですが、非常事態なのと経済的援助の期待もあつてか町兵50人が割り当てられています。藩全体の募集予定者は2,700人で、このほか、代官などの関係者・郷頭・肝煎などの役人380人を合わせると総勢3,080人になります。7月にはさらに1,500人の追加割り当てが行われ、計算上の各代官所の農兵数は野沢代官所150人(152人)、館原代官所290人(377人)、津川代官所390人(371人)となりました。実際の帳簿上では( )内の人数のようで、農町兵は約4,000人程度であったことになります。

農兵の条件は戦況に応じて変わります。慶応4年2月、館原代官所から山三郷の郷頭・肝煎への申しつけに、「男子の20～40歳で身体壮健の者で肝煎・<sup>じがしら</sup>地首の子弟、あるいは獵師から選ぶこと」とあり、農兵は刀を持つことが許されるなどの武士的身分となるため、農民でも身分の高い村役人と鉄砲の扱いに慣れている者に限定されました。

<農兵の条件>



◀ 20～40歳で身体壮健  
肝煎・地首の子弟



▶ 獵師



(三留)

広報にしあいづは今月号で発行800号を迎えました。表紙作成のため、過去の号を読み進めていくと、その時代の背景や出来事が生き生きと浮かび上がってきます。時が経ち、時代が変わっても地域の人々の思いや、温かさは今も昔も変わらず存在しているのだと思います。そんな思いを込めて、過去の紙面とオトメユリを背景に表紙を作成しました。これからも広報紙が町民のみなさんと町との絆を深める架け橋になりますように。

編集後記